

# リバーはライバル 仁淀川 VS 四万十川

2012.2.4 仁淀川シンポジウム



仁淀川清流保全推進協議会

# 仁淀川シンポジウム 次第

～親しむ、つながる、守る 清流仁淀川はみんなの宝～

- 主催：仁淀川清流保全推進協議会・高知県 / 共催：仁淀川流域交流会議
- 日時：平成24年2月4日（土） 午後1時～5時
- 場所：いの町すこやかセンター1階 大会議室

## 1. 開会挨拶

## 2. 基調講演（80分）

講演者：梅原 真（梅原デザイン事務所代表）

演題 「～リバーはライバル ～ 仁淀川 VS 四万十川」

## 3. ポスターセッション（50分）

進行：石川妙子（仁淀川清流保全推進協議会会長）

発表者

①井上光夫（によど自然素材等活用研究会代表）

「今年のシンポジウムから今年そして未来へ」

②谷地森秀二（四国自然史科学研究センター長）

「みんなで調べる越知町の生きもの」

③筒井静一郎（高岩・広瀬地区地域活性化協議会会長）

「高岩・広瀬地区の取り組み」

④生野宜宏（仁淀川お宝探偵団理事長）

「お宝探偵団 現在の活動と提案」

⑤西川多紀（NHK高知放送局ディレクター）

「知られざる清流を知ってほしい！」NHK高知 仁淀川プロジェクト

## 4. パネルディスカッション（90分）

テーマ「川を守ろう、親しもう ～川楽談義～」

コーディネーター：石川妙子（仁淀川清流保全推進協議会会長）

パネリスト：梅原真（梅原デザイン事務所代表）

井上光夫（によど自然素材等活用研究会代表）

西尾健一（高知県地域産業振興監 仁淀川地域担当）

## 5. 閉会挨拶

## はじめに

仁淀川流域においては、流域の皆様とともに平成22年3月に、第2次仁淀川清流保全計画を策定し、同年6月には清流保全計画の推進母体となります仁淀川清流保全推進協議会を設立しました。

清流保全計画に基づいた具体的取組として、仁淀川清流保全推進協議会及び高知県の主催により、平成24年2月4日（土）に、「仁淀川シンポジウム」をいの町で開催しました。

このシンポジウムは、「親しむ、つながる、守る 清流仁淀川はみんなの宝」をテーマとしており、仁淀川への思いを語り合う場として、また、仁淀川流域での様々な取組を情報発信する、共有する場として開催したものです。

内容は、デザイナーの梅原真さんの「～リバーはライバル～ 仁淀川VS四万十川」と題した基調講演、仁淀川流域での保全などの取組について発表をいただいたポスターセッション、仁淀川を守る、親しむをテーマとしたパネルディスカッションの3部構成で行いました。

会場のロビーでは、NHK高知放送局提供による仁淀川の美しい写真パネルの展示、各流域の特産品やパンフレットなどの展示・PRを行い、約170名の方に参加をいただくことができました。

また、昨年10月には、流域が一体となった仁淀川一斉清掃を実施しました。

この清掃には、天候が悪い中にも関わらず、500名を超える参加があり、1.5トンのゴミを回収することができました。

こうした取組を通じまして、参加いただいた皆様の清流保全の意識の高まりや、仁淀川への関わりを今まで以上に深めていただけたらと願っています。

シンポジウムに参加いただけなかった皆様にも、こういったシンポジウムであったのかをお伝えするために、今回の報告書を作成しました。

この報告書が皆様にとって、今後の活動に何らかのヒントとなれば幸いです。

私たち、協議会では、今後とも、日本一の清流仁淀川を守る取組を進めていきますし、参加いただきました皆様には、それぞれの活動に頑張っていただくとともに、協議会の取組にもご支援、ご協力をお願いいたします。

シンポジウムの開催にあたりましては、地元のいの町をはじめ、関係者の皆様に多大な協力をいただきました。この場をお借りしまして、皆様に改めて感謝申し上げます。

平成24年3月吉日

仁淀川清流保全推進協議会

会長 石川 妙子

## 仁淀川シンポジウム 会場の様子I



## 基調講演

# 「 ～リバーはライバル～ 仁淀川 VS 四万十川 」

講師：梅原 真

---

### (講師略歴)

昭和25年 高知市生まれ  
昭和47年 大阪経済大学経済学部卒業  
RKCプロダクション就職  
昭和54年 退職後、米国大陸横断  
昭和55年 30歳で独立。  
平成元年 十和村(現四万十町)に移住  
平成4年 高知市に戻る



「漁師が釣って 漁師が焼いた」のキャッチフレーズで有名な一本釣り薫焼きタタキや、大方町の「砂浜美術館」、四万十川を中心に豊かさとは何かを考える「四万十ドラマ」のプロデュース、川とは切り離せない高知の森のブランド化「84プロジェクト」、秋田県イメージアップ戦略アドバイザーなど、日本を代表するデザイナー。

著書「ニッポンの風景をつくりなせ」、「梅原デザインはまっすぐだ!」(共著)

---

## リバーはライバル

高知市で生まれて、5歳から10歳までの間ぐらひは鏡川へ飛び込んで泳いでいた。その後、40歳の時に四万十川に住んでいた。いまは家の目の前に、物部川が流れている。川とは関係があるなど思いながら、自分の切り口で話します。

ライバルの語源はリバーだそうで、元をたどれば、水源を争い合うところからライバルがきている。

仁淀川と四万十川を比べてみると、まさにライバルのような感じがする。

2つの川を対比してみると、水系は1級水系で同じ、四万十川は全長196km、仁淀川は124km。水源の高さが違う。

沈下橋は四万十川が47、仁淀川が5つと、その支流に16、併せて21。

四万十川の魚種は200種類。近年この3年ぐらひで120から200に増えたそうだが、水が汚れたせいなのか、学者じゃないのでよく分からない。

仁淀川の魚種は88種類。水質は全国1位だった。

ざっと対比してみたら、こんな感じになる。

仁淀川のことはよく知りませんが、四万十川の十和村に、39歳で住み始めた話とか、四万十川でやってきたことを話しますので、「リバーはライバル」というのがヒントになればいいな、と思います。

## ジブンモノサシ

これは「十和ものさし」という十和村の総合振興計画。

今から27～28年前のこと。十和村総合振興計画と書いてあります。

総合振興計画は、自治体が10年ごとに10年間の振興構想をまとめてなくてはならない、これは法律で決まっている。

ただ、「十和村総合振興計画」という言葉は、すごくストレートで当たり前、面白くない。「だったら、どうしたらいいの」というので、「十和ものさし」という振興計画を作った。



つまり、振興計画というのは「その村のものさしを作ることでしょう」という意味。今から「この村のものさしをつくりましょう」と、そういう計画を2年間かけて作った。

十和村総合振興計画と言ったら、「そうですね」で終わるが、「十和ものさし」と言ったら、「えっ 何ですか？」になる。そこがコミュニケーションのスイッチの入れどころ。

この振興計画を作っている時に、沈下橋は47あったが、洪水時は水が来るので、橋を渡れないため、沈下橋を壊して大きな橋に架け替えよう、となった。

当時、建設省に陳情に行くことが村長の仕事。あの振興計画にも書いている。

僕は沈下橋は残した方がいいと言ったが、村民の悲願で、「ここ浦越に橋を架けたいのに、何を言っているんだ」と言われた。

「じゃ、おれ住んでみるわ」ということで、<sup>かやぶきて</sup>芽吹手というところの沈下橋の向こうの家、といっても屋根は壊れていて、床はズルズルだったが、そこに39歳の夏に移住し、4年間住んだ。住んでいるうちに、上流の大正町方面から国道の2車線化が進んできた。自宅の辺りで鮎を獲っていたが、鮎を獲っていたところの上流の大半がコンクリート護岸になってきたから、4年目の時にこの沈下橋の家を出た。

## 答えは水の中

私が村を出た後に、北幡3町村が出資する株式会社の四万十ドラマが始まって、そ

この畦地（四万十ドラマ現社長）から「何か産物を売っていきたい」と相談があった。

四万十ドラマという名前では売れないだろうと思い、まず「ココロザシ」を見せなさいと言って「水」の本を作った。

これは、水というテーマの本を四万十川で作るということ。

普段はNHKの「最後の清流 四万十川」のように、東京から取材をされ、東京から発信されている四万十川がある。取材をされて東京発信。

大胆だがその逆をやろうと、四万十川が中心になって、四万十川が編集をする。

水というテーマについて、色んな著名人に「あなたの“水”を書いてください」と、原稿をお願いして、45人分の水エッセイを本にまとめることにした。

しかし、お金がないので、原稿料は鮎1kgを三年間届けます、にした。

僕が住んでいたところで自分で鮎を獲っていたので、自分で獲ればタダ。

都会に送ると、東京では1匹が何千円かするわけ、向こうの人は原稿料を何万ももらった、と思うかもしれない。これが原稿料、自分達で獲ればタダ。

こうして45人をお願いをしたが、実際なかなか原稿を書いてくれない。

一番最初に返事が来たのは筑紫哲也さん。「書きます、書きます」と、これは嬉しかった。ところが次々にNOというか、書かない、あるいは返事がない。ここから苦勞してなんとか、45人の予定の所を結果、18人の人に書いてもらった。

筑紫哲也さん、カメラマンの浅井慎平さん、赤瀬川源平さん、天野祐吉さん、黒田征太郎さんはエッセイではなく絵を描いてくれた。糸井重里さん、版画家の山本容子さんがエッセイと絵をつけてくれた。

これを四万十川で編集する。つまり、東京にいる人を、ローカルの四万十川が編集をした。そして「水」という1冊の本ができあがった。

これが四万十ドラマの第1作、仕事の作法です。

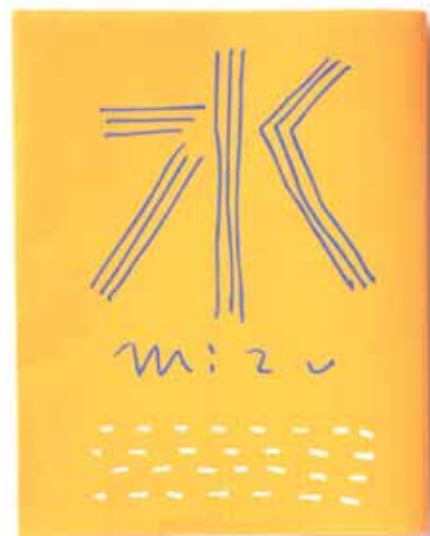
これは何かというと、まず「ココロザシ」を見せろと。

「四万十ドラマってなんなの？」と言われた時は、水という万物の根源を、皆さんにエッセイとして書いてもらい、編集し、まず水とは一体何なのかから始める、という風に四万十ドラマを創り上げた。

そこから物を売っていく。最初から物づくりではない。

四万十ドラマの商品の第1号が、考え方で豊かになる「ひのき風呂」。

みんなは、四万十の絵が売れないと言う。家が建たないから、本当に売れてない。



「それじゃあ、僕が売りましょう」と、どうやったか。

家を作った後に残る柱材などの端材を集めて、焼き版で「四万十 ひのき風呂」と押し、ヒノキチオールという、桧から抽出した天然成分をつけて、袋に入れる。

これをお風呂で開けて貰うと、4日間桧風呂が楽しめるというもの。

大正町・十和村・西土佐村の課長とかは「そんなもの売れるんか」と。当時の商品開発は、3町村の課長が出てきて商品開発会議をやってたので、ノリが悪かった。

ところが、この商品ができた途端、四国銀行がノベルティとして1300万円分購入したいと言ってきた。

その時点で、1300万すぐ入ったわけ。その次は四国電力で何百万。

このパターンで、ノベルティとしてのオリジナリティを保ち、小売りをせず、ノベルティばかりをやって、この板が2年間で1億円稼いだ。

森を材木と思ってる限りは赤字。桧の香りを抽出して、香りビジネスをやるんだということ。いつまでも、森を見て、「材木が売れん」と言うのが人間の本性。

でも「森は香りじゃないか」と言って、香りのビジネスをやった。

森を見て「材木が売れんのう」という考え方は豊かではない。



## じつは茶所

お茶のアイテムは、香・甘・苦・渋という、「香」はかおり、「苦」はにがい、「甘」はあまい、「渋」はしぶい、この4アイテムのブレンドによって、お茶は味が決まってくる。

四万十のお茶は静岡のコンテンツの味として、その中の1アイテムにされていた。

お茶の葉を手摘みでとっているこの夫婦、上山のおばちゃん、おじちゃんです。この風景を僕がデザインをかますことによって、今までの産業と違うものにする。

この風景にデザインをプラスするということ。

「じつは茶所 しまんと緑茶」。ここはいわゆるお茶どころなんですが、高知に住んでいても誰も知らなかった。

それをブランドにする、1つのメッセージを持って、覚えてもらうことです。

「じつは茶所 しまんと緑茶」と言って覚えてもらい、そのメッセージによってブランドが出来ていく。





分かりやすく言うと、「タタキ 買ってくれませんか」はメッセージじゃない。「漁師が釣って 漁師が焼いた」と、メッセージをチェンジしただけで、100万本も売れるようになった。お金をつぎ込んで宣伝するよりも、頭を使うこと。

面白いことに、十和村のこの地域、40年前は紅茶の生産地だったが、セイロンの紅茶が5分の1の値段で入って来て、紅茶の価格が暴落したため、40年前に皆やめてしまった。でも紅茶の生産技術は持っているのもつちの方が面白い。

これにデザインを入れると、このようにドンゴロス（茶葉を置いて水を掛けて、またドンゴロス（茶葉を置いて、発酵具合を見ながらアナログで生産する。

それを「自家発酵」と言ってる。僕が作った言葉。

「自家発酵 しまんと紅茶」。その下にルビとして、「しまんとRED」とした。

これを見た、東京のスーパーの成城石井から社長とバイヤーが来て、「しまんとRED」を取り引きすることになった。

## しまんと地栗 スタジオジブリ

今度は栗。栗を拾っている高齢者がいる。いが栗の中から割って栗を出している。10年程前から価格が落ち始め、1kg500円だったのが、今は1kg200円になったため、この仕事に就く若者はいない。栗を拾ってもしょうがない。

それにデザインを入れて変える。栗の見かけは、ただのコンプレックスの塊。

しかし、そこにプライドと新しい感性を加えて産業にする。

この商品名を「しまんと地栗」と名付けた。やや悲しい栗を、「しまんと地栗」と言うことによって、何かしら新しい価値観を産み出す。

何となくスタジオジブリみたいな感じになり、デザインが加わるとこうなる。

7個ぐらい入って2500円。高いが、高級通販ルートでバカ売れしている。

道の駅では、高くてなかなか売れない。しかし、割れたものもあるわけ。

だったら、その割れたものを集めて売ろうと、パッケージを作るとこうなる「しまんと地栗 われ」。



この商品は1800円だが、2500円の商品の隣に置くことで、すぐに売れる。考え方で豊かになるのというのは、こうゆうこと。

商品のデザインではなく、考え方をいかにプラスするかということ。

つまり、栗の名前を「しまんと地栗」と呼んでしまおう。ビン詰めしてしまおう、その割れたがも売っちゃおうと。これが豊かなことではないのか。

僕はデザイナーなのでデザインを持っているけど、別に考え方でいい、デザイナーじゃなくてもいい。

地べたに転がっている茶色い三角形のものを、いかに楽しく、おいしく世の中に出していこうかということをやっているだけ。

そして、今度は農水省の事業を活用し、1万本の栗の木を山に植えていく。

桃栗3年なんで、今から植えても3年は実はなっていないが、1万本事業が始まった。

「しまんと地栗」のちょっとした小さな感性から始まって、栗の割れたものを「われ」として売る、むしろ割れたものを商品の価値として売るといふ、したたかなところ。何よりも中国産ではないということ。つまり、時代は森を応援している。

## 新聞紙で世界を包む

小学校の時に越前町で育った。母と魚屋に行くと、鰯がホーローに5匹ぐらい入れてあった。ホーローの鰯を指差すと、吊ってある新聞紙の束を、エプロンを着ているおじさんが取って、その鰯をちょんちょんと入れて「はいよ」と、母がエコバッグというか、当時当たり前の買い物カゴの中に入れてた。

昔は魚を包むのも、全部新聞。発泡スチロールやレジ袋なんてなかった。

だから、「四万十川流域のものは、全部古新聞で包むぞ」と言い始めて、7年ぐらいになる。自分たちで、販売するものは新聞紙で包もう、白菜は新聞紙で包もう、チューインガムも新聞紙で包もう、みんなで袋を作ろう、と言って作り始めた。

折り紙をうまく使った技術、折り紙は日本の技術。そこに取っ手だけをのりで貼りつけた、四万十川の新聞バッグ。僕のコンピューターは、このバッグに入れてきている。

これは四万十川道の駅等で150円で売っている、買ったものはこれに入れて帰ってもらう。

レジ袋がどうしても欲しい人には5円いただいている。中には「レジ袋に5円いるんですか」という人もいる。

必要なのは、「私はこう考える」という考え方。新聞だと、土に戻るということ。



サービスが少ないという問題ではなく、どこにウエイトが掛かっているかどうか。むしろ、5円取るなんて素晴らしい。大事なのは、自分の考え方を持つということ。

新聞バッグは、四万十川の一点から日本に、世界へ広がり始めている。

次はベルギーで始まった。作ってみたら面白い、というので去年の10月の初めから4週間、新聞バッグ用のデザインを作るために、De Morgen社という35万部を発行する新聞社から、地元の有名なデザイナーに描いてもらった。

新聞バッグになることを想定した紙面デザインで、作ればこうなるとベルギーの国民に作り方を話しながら、このプロジェクトを4週間やり、ベルギー中に広がった。

地球を新聞紙で包む状態が始まっている。ここで考えたいのは、地球の別のポイントに行くということ。田舎とかローカルとか関係はない。一挙にベルギーに飛んで行った。

## 絶対価値

ちょっと真面目な話を、2010年の製造品出荷額の都道府県別の順位ですが一番上から高知、沖縄、鳥取。1番上からだ、製造品出荷額は、愛知、静岡となる。

製造品出荷額が上に行くほど豊かだという1つの指標だが、これが今の日本には大きな指標。製造品出荷額によってあなたのところは遅れている、と言っている。高知県は1番べつただと。

でも、高知、沖縄、鳥取の方が豊かだなど、僕はマジで思ってる。

今の順位は相対価値で、なんぼのもん。神奈川が、愛知県に順位が3つ負けてるとか、この順位を比べ合ってもあんまり意味がない。それよりも大事なものは絶対価値。

高知で食べる塩タタキと同じ物は大阪や千葉では絶対食べられない。

鰹がそこにあっても、高知の湿度の中で食べる、薫焼きも薫も違う、そのものが絶対価値として光ってる、という考え方をする。

みんな絶対価値なんだと。京都の絶対価値、京都の絶対価値は誰もが認めている。

高知も自分でその絶対価値を認めないかということ。

絶対価値を認め合うことによって、相互の光を見に行くことが観光。

光を観る。そう考えたら移動する意味がある。

ここの光を観に行く、ここの絶対価値を観に行くわけ。高知はこの絶対価値を観てくれ、だから絶対価値は観光の資源であると思っている。

ここで仁淀ブルーが出てくる。仁淀ブルーは1個しかない。最後に残された仁淀ブルーに光が当たった。僕は高橋宣之から昔からずっと聞いていたし、一緒に森に入ったこともある。素晴らしいなと思っている。

そのことを皆さんがどう考えて、どう思うかというのが今日のテーマ。

## Tシャツひらひら

砂浜をどう考えるか。もう27年前になる、当時大方町の砂浜にリゾート開発をしようとしていた。僕はリゾート開発を行うより、砂浜にTシャツをひらひらさせた方がいいと言った。

ただ、自治体のリゾート開発の動きを止めながら、Tシャツをひらひらさせるイベントをやるなんてことは、並大抵のことじゃなかった。

今でこそ26回目とか言っているけれど、ここまでくるのは大変だった。

なぜか？ その当時は、みんなここにリゾート開発したかったわけで、その考え方なかなか変わらない。

地元「おまんがこの町を救った」とお褒め言葉をいただくまで25年かかった。

リゾート開発をせずに、全国から集めた絵や写真をTシャツにプリントして、砂浜美術館として、ここでは全てが作品ですと、考え方をデザインする。考え方で豊かになろうと言った。

しかし、みんなはそう思えなかった。「こんなもの何」と言ってた。



ラッキョウを食べるもんから「ラッキョウの花見」をして、価値観を変えていった。

砂浜を裸足で走れるマラソンなんていうのは、最高に豊かなことじゃないのか。

裸足で地べたを踏みしめながら、4キロメートル走れる。何が豊かなのかの考え方でしょう。

しかし、決してそこには行かない、「これがなんぼのもんじゃ」という世界がだいぶ長かった。「梅原さん、そんなの走っても、お金になってへんやん。」そう言うのか、言わないのか、豊かな考え方ができたかという話。

高知の人が高知のユーモアを含めて、こういう考え方でやっていきましょう。

南国の昼下がり3時頃の風景で、T シャツがひらひらしてる風景が豊かやなと思えなかったら、もう高知はアウト。

考え方で豊かになれる、なるだろう、なるんです。

この浜にはゴミが流れてくる。ゴミを並べて漂流物展をやった。

漂流物展のポスターは、ゴミで作ることにして、毎年ゴミを拾ってはポスターを作ってきた。例えば、流れてきたものはピアノの鍵盤です。どうやってポスターを作るか。「音どけもの」です、お届け物。

ゴミでしかポスターが出来てないから面白い。

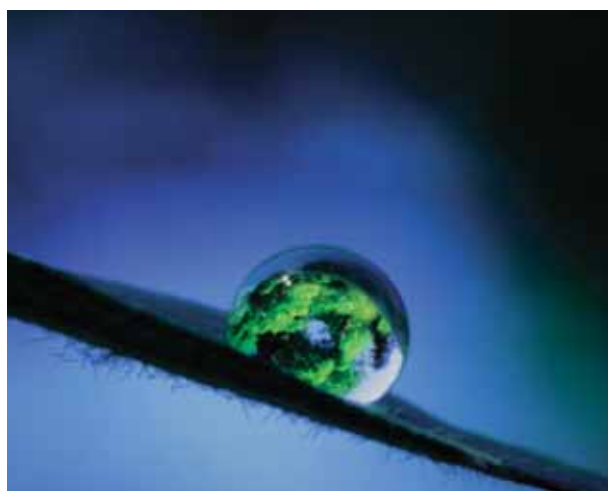
金があれば何に使うか分からない、ゴミでポスターを作ること。ゴミだからこんな面白いものが出来ると考える、考え方で豊かになるとはそういうこと。

おとし、モンゴルの草原でタイアップして草原美術館をやった。モンゴルまで行った。

## 水滴の森

写真家の高橋宣之の写真です。仁淀川の上流の一点の水滴の中に映った仁淀川の源流域の森が、この水滴に映ってるんです、ここに。

これは高橋宣之本人からお借りした写真です、この中に仁淀川の「ココロザシ」、あるいは、これから川をどのように売っていくのか、売っていかないのか、仁淀川をどう考えているのか、という話が、おそらくこのシンポジウムのテーマだと思うが、この一点を見つめながら仁淀川の事を考えてほしい。



私は「84プロジェクト」をやっている。高知県には平地がない。森林率 84%、

日本一の森林率。高知県生まれで、高知で育ったけれども、川で遊んでいたために、高知の森林率がそんなに高いとは思わなかった。

84%に気がついたのは5年くらい前。それを悲しむのではなくて、84（はちよん）を喜ぶ、楽しむ、それが84プロジェクト。自然に楽しむ。日本一の森林率の中で働いている人が、背中に84の誇りを背負って働いているということ。

そういう新しい価値観を生み出しているという部分で、デザインを加えて、誇りに思い、楽しくしたい。

84プロジェクトを始める時に、高橋宣之を特別顧問に招へいしていますが、彼は無茶苦茶恥ずかしがり屋。1番最初の会の時、僕がこの84プロジェクトの話をする時、一言彼が言いました。「梅ちゃん84もええけど、0.84もちゃんと言いよ」。0.84というのは何かというと、森の1%は原生林。四万十川流域はほとんど植林されたけれど、仁淀川流域は急峻なために、植林がなかなかできなかった。

そのため、仁淀川には原生林が残されている。その森のことを84プロジェクトに位置付けてやってくれよと言われた。

あれから2年が経ち、「0.84会議」を4月5日の木曜日に県立美術館ホールで開催します。仁淀ブルーに登場しなかった未公開映像も含めて、森の話を高橋宣之自身から聞く。恥ずかしがって「イヤイヤ」と言っていますが、なんとしても特別顧問なので、姿を出さなくても、映像の中で説明せよと言ってある。

4月5日は、美術館ホールにお越し下さるようお願いいたします。ありがとうございます。

(会場からの質問)

「リバーはライバル」という話ですけれど、今後、仁淀川は盛り上がっていくだろうと、四万十川と仁淀川というのは、どういうパートナーシップになって、相互の絶対価値を発信して行ったらいいのか、何か考えとか思いがあればお願いします。

(梅原)

1週間位前に、高橋宣之と久しぶりに飲んで仁淀川と四万十川の事を聞いた。

全く違う川らしい。四万十川はなだらか、四万十川の方が自然が残されていると思ってるけど、なだらかなために雑木林が多いので植林された。そのため、四万十川筋で紅葉を見たことがない。一方で、仁淀川は険しいあるいは岩盤質のため、原生林が残っていて、2つの川は全く違う個性なんです。

僕は四万十川の流域に住んでいて、感じたことを言いました、というところからヒントを得て欲しい。

何か大きな産業を作ろうとしてはいません。桧の板切れを切って、匂いを付けて、その香りビジネスを選んだ。森にあるものは材木ではない。

このような、いわゆるソフトというか、むしろ形作る前に考え方が必要。仁淀川にしっかりとした考え方がありますか？あるいはなければお宝ですので、作って下さいということがコンセプト。という意味で、「リバーはライバル」であるということ。講演会で「自然を守ろう」という様なタイトルは嫌でしょう。

どこか何かうざいなと思って聞いて欲しい。だからわざと仁淀川と四万十川を対峙するようにした。

今日の話は、仁淀川をどう売り込んでいくかの、売り込み方の問題ではなくて、言

えるのは、この仁淀川流域のイメージが、例えば僕が北海道に住んでいても、仁淀川と聞いただけで素晴らしい地域なんだってと思えるようになれば、この地域から、材木なり、商品なりをもし売り出して行く場合には、イメージの部分でプラスになるので、そういう意味での仁淀川のイメージづくりをして欲しい。

四万十川は、多少そういった意味でやっているところがあり、ただ物を売るだけではなくて、新聞バッグのように、会社の理念としてやっている。

そう考えれば、新聞バッグによって利益を得なくても、会社の理念を発信するという意味で、価値を付けながらやっていく方法もある。

その考え方を皆さん今からお考え下さいねという、あるいはすでに考えてらっしゃるなら、それをお聞かせ下さいね、ということ。

そういう意味での2極、仁淀川と四万十川を対峙させたということです。

水質では、四万十川は仁淀川に全然かなわない。仁淀川を売り出す時には、その辺がヒントになります。そういう意味での話をしました。

(会場からの質問)

私は23年くらい雑木山で木を切っております。

オンツツジとか、サクラとか、見頃はいつですかとよく聞かれる。四六時中いつ行っても楽しいと。最近思うことは、気持ちいいってなんだろう、俺は癒されているんじゃないのか。雑木山を23年も世話をしてきたが、癒し効果づくりをやっているといえればカッコいいんじゃないかと、思ってますが、どうでしょうか。

(梅原)

癒されているんじゃないのかなと思った時点で、癒されていると思います。

みんな効率を考えて、杉・桧の単一植林にしちゃって、経済をもとにした国の植林行政は全く人の心を癒さない。全国の森林がそうなった。

その考え方で雑木は、雑の木なので価値がないと言われた時代があって、家の材になる杉・桧が価値があるとされてきた。

これをまに見直しているところがポイントで、経済オンリーの考えで植林して、杉と桧にした。そうすると効率よく材が出来るからです。そういう経済中心に考えると、とんでもない歪みがおきてくる。

雑木に対して自分は癒されているんじゃないかと、雑木の部分に今まさに、複雑なものに対してスポットが当たっているということ。

いわゆる経済の軸で全部考えていくことが、既に間違っていたという答えを出さないといかん。そうではないものに価値を見出すということをみんな考えていく日が今日ということです。

## ポスターセッション

進行	石川 妙子	
発表者	井上 光夫	によど自然素材等活用研究会代表
	谷地森 秀二	NPO 法人四国自然史科学研究センター長
	筒井 静一郎	高岩・広瀬地区地域活性化協議会会長
	生野 宜宏	仁淀川お宝探偵団理事長
	西川 多紀	NHK高知放送局ディレクター

### (1)「昨年のシンポジウムから今年そして未来へ」

井上 光夫 (によど自然素材等活用研究会代表)



- ・工場の誘致ではなく、仁淀川町にあるものを使って生きていく仕組みを考えるために「によど自然素材等活用研究会」を平成21年4月に設立。
- ・平成22年度に、3つのプロジェクトと仁淀川シンポジウムを実施。
  - 「親しむプロジェクト」  
越知町黒瀬キャンプ場にて、親子カヌー教室や環境学習を実施。
  - 「考えるプロジェクト」  
廃校になった仁淀高校が続けてきた水質調査を仁淀中学校に引継ぎ、調査実施。
  - 「守るプロジェクト」  
土佐市の河口にて、仁淀川町民と土佐市民が、ゴミ拾いと交流会を実施。
  - 「仁淀川シンポジウム」  
流域住民相互の情報交換を行うためにいの町にて開催し、基調講演、一言メッセージ、パネルディスカッションを実施
- ・平成23年度の新たな取り組み。
  - 「伊予鉄トラベルツアーの受入れ」。  
地元の方が地元の言葉で伝え、地元の方も収入を得る仕組みづくり。
  - 「Bスタイルプロジェクト」の開始。  
仁淀川町にあるものを見直し、考え方を考えるをコンセプトに活動。  
高知大学生と共同で、お土産商品「いもちっぷ」を開発。



**昨年のシンポジウムから  
今年そして未来へ**

によど自然素材等活用研究会  
代表 井上 光夫

わたしたちは  
地域の資源や素材を見直そう！  
そして  
新しい価値を産もう！！

↓

**によど自然素材等活用研究会**  
(H21. 4~)

エコプロジェクト2010 in 仁淀川

**仁淀川シンポジウム**

会場:かんぽの宿(予定)  
(協力:河川管理者、土佐市、その他)  
内容:3プロジェクト及び環境活動の報告・PR  
基調講演、パネルディスカッションなど  
愛媛県面河川(仁淀川)も含めた情報共有を行う！

仁淀川の大切さを **共有!**

によど自然素材等活用研究会

伊予鉄トラベルツアー実施(6/26)



小型バスで行く、仁淀川町の奥地を巡る旅



Bスタイル事業 キックオフミーティング 10月

さつまいもの新たなプロジェクト



地域住民による潜在産業の生業化

## (2)「みんなで調べる越知町の生きもの」

谷地森 秀二 (NPO 法人四国自然史科学研究センター長)



- 越知町の中学生を対象に、周囲にどんな生き物がいるかを調べる授業を紹介。
- 調査にあたって、越知中学校、横倉山自然の森博物館と NPO 法人四国自然史科学研究センターが連携して実施。
- 中学校の総合学習の時間を活用し、平成 17 年度からスタートし、8 年目。
- 目的  
越知中学校の周囲にどんな生き物がいるのか、越知町の人と生き物たちの間に何が起きているのかを生徒自身が調査する。
- 内容  
横倉山の登山道に巣箱を仕掛けて、定期的に仁淀川の鳥を観察。  
田んぼのおたまじゃくしの特徴からどんな蛙になるかを予想し、予想どおりの蛙になるかどうかを調査。
- 動物調査方法  
動物の熱を感知すると自動シャッターを切る無人撮影用ロボットカメラを使って、越知町にどんな動物が存在するか調査。
- 確認された動物  
狐だが変わった個体。背中が黒い、日本の狐は背中が赤茶色、北海道で毛皮を取るために銀ぎつねを外国から導入、その混血なのか？  
アナグマ。イタチの仲間、大きな動物で、カンタロウをよく食べる。高知のアナグマは毛が薄くて、よく裸の固体が写る。
- 子供達は喜び、学校の周囲にこんな動物がいるのが分かって、身の周りの林に興味を持つ。
- 室内での活動でアナグマの解剖や骨格を標本にし、骨がどういう風に並んでいるかを調査。



### (3)「高岩・広瀬地区の取り組み ～川と川、道と道 人と人の交差点」

筒井 静一郎 (高岩・広瀬地区地域活性化協議会会長)



- ・高岩・広瀬地区活性化協議会は活動を始めて1年位。
- ・高岩・広瀬地区は、上八川川と小川川が交差し、国道194号線と439号線が交差する場所。
- ・昔は、夏は川で遊ぶのが当たり前だったが、川に親しむ人が少なくなった。
- ・川を1つの柱として地域を盛り上げていくために、活性化協議会を立ち上げた。テーマは、川を通じて子供達の遊び場、大人達の社交場、利用しやすい川原の整備等。
- ・高岩と広瀬地区を結ぶ高岩橋は、昭和3年に完成。平成16年には、国の登録有形文化財に指定されたノスタルジックな橋。
- ・この橋を使って「七夕祭り」やおきやくの開催を考え、昨年7月2日(土)に、高岩・広瀬むささび温泉七夕祭りを夕方から開催した。
- ・橋の飾りつけは、孟宗竹で長さ10m位のものを6本飾った。
- ・参加者は予想以上で、250人くらい来た。
- ・おばあちゃん達が「こんなに子供を見たのは何年ぶりやろう」と言ってくれたのが、最高の思い出。
- ・昨年の12月にも高岩橋にイルミネーションを飾った。
- ・人が集まることを実施するだけで、地域に元気を与えられる。
- ・我々がしたことは、きっかけづくり。住民がやる気になり、良い関係が築けた。
- ・今後は上八川川や小川川の清掃や整備を行い、川で遊べる場所を提供。住民とふれあいながら、他から来た人が親しみやすい環境を作っていきたい。

## 高岩・広瀬地区の取り組み

高岩・広瀬地区地域活性化協議会

川と川、道と道  
人と人の交差点

## 高岩の由来 名のついた岩 (秤岩・角岩・骨岩・高岩・丸岩)



## 地区のシンボル『高岩橋』

昭和3年3月完成(平成16年3月2日 国の登録有形文化財に指定)



## 高岩広瀬 七夕祭り



## 高岩広瀬 七夕祭り



## 冬のイルミネーション カラオケ大会



#### (4) 仁淀川お宝探偵団 現在の活動と提案

生野 宜宏 (仁淀川お宝探偵団理事長)



- ・ 3.11 の東北大震災がもたらしたものの、我々が感じたのは驚きと恐怖。疑問と怒りと悲しみ。決意してアクションを起こす、動けば変わる。
- ・ 自立に向けた市民の目覚め、リセットのチャンス。地方の自立のチャンス。
- ・ 自立を仁淀川で考えると、仁淀川流域の最大の問題は人口流出。
- ・ 仁淀川には、お金にはならないけど大切な仕事がたくさんある。
- ・ 若い人が定住するには、仁淀川に愛着を持つ子供を育てる。
- ・ 若い家族の生活安定を保障する。
- ・ お金に頼らないで暮らせる仕組みづくり。
- ・ GNH＝幸福度を尺度とする社会を目指す、自立した流域を目指す。
- ・ そのために、仁淀川国際水切り大会、今年は第9回。  
300人位集まって、色んな人達が水切りをして盛り上がる。
- ・ 身近な水環境の全国の一斉調査、ガサガサ探偵団、エコツアー、城下さんを中心とした色んな体験ツアーの実施。
- ・ 仁淀川における自立とは、仁淀川は豊かだと気づくこと。  
そのための仕掛け作りをやってきた。  
大人が目を輝かせて夢を見る世界を実現したい。

## 仁淀川お宝探偵団

現在の活動と提案

## 3.11の大震災がもたらしたものの

- ① 驚きと恐怖
- ② 疑問
- ③ 怒りと悲しみ
- ④ 無力感と自責の念
- ⑤ 責任
- ⑥ 決意   アクションしかない！  
動けば変わる！！

## 仁淀川お宝探偵団の企み

- 仁淀川に愛着を持つ子供を育てる
- 若い家族の生活安定を保証する
- お金に頼らないで暮らせる仕組み
- 幸福度を尺度とする社会
- 自立した流域

仁淀川国際水切り大会

身近な水環境の全国一斉調査



ガサガサ探偵団

エコツアー



## 仁淀川における自立とは

実は仁淀川は**豊か**だったと  
まず気づくこと

(意識改革の始まり)

## (5) 知られざる清流を知ってほしい！

### ～NHK高知仁淀川プロジェクト

西川多紀（NHK高知放送局ディレクター）



- よく知っている清流だが、四万十川と比べると、全国的に知名度は落ちる。
- 一昨年の12月から撮影が開始。去年の春頃から、短い番組や番組の間のスポットで印象的な映像を放送。夏からスペシャル番組を四国4県、全国に向けて発信。
- 番組制作と、全部署が一致団結、ロビーで高橋宣之写真展、トークショー、特設ホームページを立ち上げ、精力的に広報展開。
- きっかけは高橋宣之さん、この方なしには番組の成功はなかった。キーマンとして、番組やクルーの案内役、情報提供とか写真映像、様々な面での協力を得られた。高橋さんはシャイな方で、当初番組の出演はなかったが、斉藤ディレクターと意気投合、彼の情熱にも感動していただき、今に至った。
- 高橋さんは海の波の写真家。そこから仁淀川の上流に向かって行って、山・源流というところに興味移ったルーツがある。
- 斉藤ディレクターの趣味が仁淀川の河口でのサーフィン。そこから水の美しさを知った、興味の移り方が高橋氏と一緒。
- 番組のキャッチフレーズ、「仁淀ブルー」、高橋さんの作品世界、スタッフが一緒にやっていく中で生まれた言葉。
- 映像表現として、今までにないやり方で撮影。通常のテレビカメラではなく、1眼レフカメラの動画機能を採用。  
波とか源流の1滴とか水の動き、効果的に映す時にはハイスピードカメラを使用。
- 撮影チームを代表して世宮カメラマンがJSC賞を受賞。
- 仁淀川プロジェクトは続いて、仁淀川を舞台にしたドラマ「カゲロウの羽」が3月16日に四国4県で、そして25日に全国放送で発信される。
- 自然ドキュメンタリーという意味での取材も継続中。
- 取材を通して感じたこと、世界一とか、ここだけしかない、とかではない。普通の川だが、そこにある美しさとか自然の尊さみたいなことを感じながら取材した。





### 1. NHK高知放送局 仁淀川プロジェクト


2010年10月	番組企画スタート
12月	撮影開始(冬の石鏡山)
2011年05月	・高知県域放送で スポット(30秒)放送開始 ・「こちら情報いちばん」で ミニ番組放送開始
07月08日	<b>【しこ8】</b> 清流 仁淀川 奇跡の色彩 ※四国四県にて放送
08月20日	<b>【夏期特集】</b> 知られざる青の世界 ※総合テレビにて全国放送
09月23日	<b>【新日本風土記 仁淀川】</b> ※BSプレミアムにて全国放送
12月16日	<b>【とさ金8】</b> 歳時記 仁淀川 ※高知県域放送
2012年 3月16日	地域発ドラマ <b>【カゲロウの羽】</b> ※四国四県にて放送予定

その他、ロビーでの写真展や  
特設HPの開設など全局的に展開

NHK高知

### 2. いま、なぜ「仁淀川」なのか

番組案内役・ロケクルー案内役・情報提供・写真提供・映像提供・撮影協力・ムードメーカー……etc



海から川、そして山へ

**高橋宣之さん**  
Takahashi Nobuyuki

1947年 高知県高知市生まれ。  
1965年 私立高知高校卒業。  
1969年 スペイン政府名譽留學。  
スペイン美術史をサラゴサ大学で3年間学ぶ。  
1972年 帰国後、高知に戻りフリーランスの写真家となる。  
1980年 ドイツ、ハンブルクMUSEUM FÜR KUNST UND GEWERBEに作品が永久保存される。  
1988年〜「土佐の四季」「仁淀川」「山水花鳥」などのテーマで作品を制作。  
現在高知をベースに、自然風景、海などを中心に撮影活動を行っている。

**斉藤勇城** ディレクター  
Saito Yuki

1981年 神奈川県生まれ  
1997年 NHK高知放送局勤務  
2011年 夏 東京 NHK放送センターへ異動

趣味のサーフィンを通じて仁淀川に触れる。「水の世紀。いまこそ仁淀川の水の感涙を伝えたい」と、2010年秋に番組を企画。

NHK高知

### 3. 仁淀川の色彩美を生かす映像表現



**仁淀ブルー**  
*The Niyodo Blue*

↓

- ・ Canon 社製「EOS5D Mark II」のHD 動画機能を採用
- ・ 河口の波、源流の一滴など、水の動きを効果的に映す際は、NHK所有ハイスピードカメラ「WeissCam HS-2」等を使用



NHK高知 世宮大輔カメラマン  
日本映画撮影監督協会賞 (JSC賞) 受賞

NHK高知

### 4. 「仁淀川」、ふたたび



2012年3月にNHK高知放送局は開局80周年を迎える。これを記念し、高知放送局初のテレビドラマ「カゲロウの羽」を制作。

手すきの和紙としては世界一の産量を誇る「土佐典具 粘紙」の工場を舞台に、仁淀川流域で生まれ育ったヒロインが、人生の再出発を果たすまでの姿を自然の美しさとともに描く。

自然ドキュメンタリー「仁淀川」も 秋・冬編を継続取材中。

NHK高知

### 5. 取材を通して感じたこと



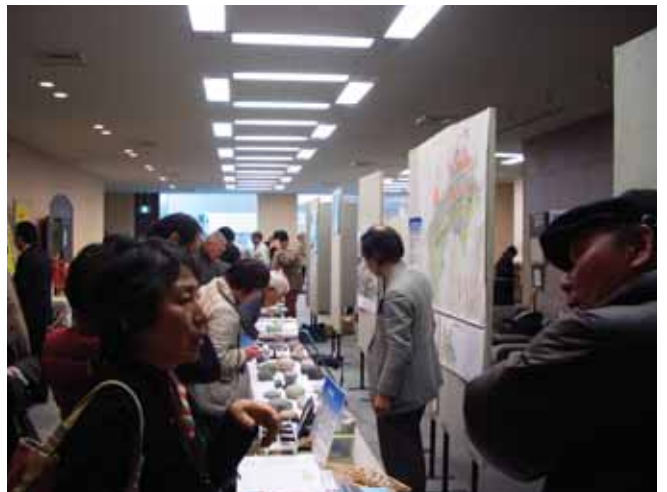
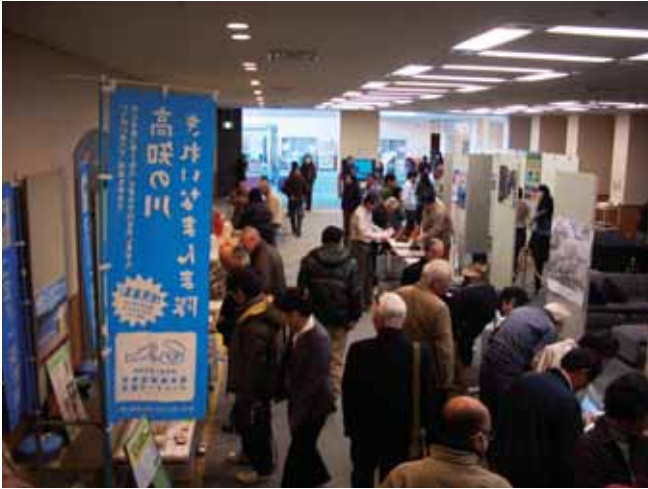
**身の回りにある当たり前前の自然の尊さ**



ご静聴ありがとうございました

NHK高知

仁淀川シンポジウム 会場の様子II



## パネルディスカッション

### 「仁淀川を守ろう、親しもう～川楽談義～」

コーディネーター 石川 妙子  
水生生物研究家

パネリスト 梅原 真 井上 光夫  
デザイナー によど自然素材等活用研究会

西尾 健一  
高知県地域産業振興監



(石川)

自己紹介を兼ねて、川との関わり、子供の頃の思い出、現在の仁淀川との関わりについて、お願いします。

(梅原)

高知市越前町に住み、小高坂小学校に通っていた。

川には、強烈な思い出がある。上町2丁目のあたり、1本南側の通町に、親戚の家があり、普通の服装で行くが、そこで海パンに着替える。

海パンのまま歩いて、堤を超えたところが鏡川。小学生で身長が低いから、土手まで行くと川は見えない。段々上がっていくと、鏡川が見えてくる。そこを駆けおりて、川にどぼん。

この印象はすごくきりっと思い出す。土手を上がる時に見えてくる川と、せみ時雨が鳴いていて、鏡川が見えてくる、嬉しい、どぼん！。という小学時代。

そのことは自分の中で、仕事も含めて、かなり大きな要素になっている。

小学校の4年生の2学期に、親父の転勤で和歌山に行った。和歌山の街の中に行くと、川がどぶで、真っ黒け。

それを見て、強烈に高知への憧れが、逆ベクトルで高知に矢印が向かった。

あの鏡川と、和歌山のどぶ川。この落差が高知を思っていくエネルギーに、イコール高知への思いみたいなものに逆流して、大学を卒業すると、一目散に高知に帰った。

そこで仕事したのは、「鏡川祭り」の現場監督だった。当時の鏡川は、何回も台風にやられ、堤防をかさ上げ、コンクリートだらけ。子供の時分のあの鏡川じゃなかった。

仕事は、花台に提灯を付ける、水上ステージを作る、対岸のコンクリートの壁面に、遠くから見たら大きい「鏡川を美しく」という看板を設置しながら、とても複雑な気持ちになった。子供の時のあの鏡川じゃないところに、「鏡川を美しく」という看板を、自分が設置している強烈な落差を思い出す。

(井上)

私が生まれたのは、仁淀川町の旧池川町の用居で、昭和36年生まれ。

小学校のすぐ近くに教員住宅があり、そこに担任が住んでいて、僕等を川や山へ連れて行ってくれた。

中学校になると、夏はずっと川、「ちゃっしん」とか「ちゃんでっぼう」で川の魚を獲って、火をたいて焼いて食べてた。勉強はしなかった気がする。

果して、今の子供に、そういうことをさせているか。

今の子供はテレビゲームやクラブをして、親ももっとクラブで強くなってほしいと思っている。川に出る機会がない、そうしたの自分ら親ではないのか。

それに気付いてほしいので、絶滅危惧種の川ガキをテーマに、去年、仁淀川シンポジウムを開催した。

川ガキを増やしていくには、親の考えも変わらなければならないと思う。

(西尾)

私は、3年前に土佐市に出来た県の産業振興事務所にて、観光組織づくりや一次製品の製品化の支援をしている。

高知市の小高坂小学校の裏に住んでいたが、田舎は宿毛市で、親類が幡多に沢山いて、子どもの頃は夏休みになると幡多に帰っていた。

水中眼鏡とエビ玉という小さい丸い玉の網とバケツを持って、四万十川の赤鉄橋の下の橋脚の所に行くと、手長エビが沢山いて、2時間くらいでバケツいっぱい獲れて、きゅうりと炊き物にして食べた、という思い出がある。

自分の子供に同じ体験させてやろうと思って、20数年後に行ったが、全然いない。

仕事で仁淀川によく行くが、一番印象に残っているのは、いの町から「くらうど」の方に行く仁淀川の風景。私の妻の母（神奈川県在住）を連れて行くと「すごくいいこの川の風景はすごい。」と。

私には見慣れて大して思わない風景が、「神奈川にこんな川はない、こういう風景は

してない」と言われた。

広島県や愛媛県とか、県外の人も「すごい、風景が違う」と言う。  
そんな仁淀川の魅力や資源とかを観光振興に活かしていきたい。

(石川)

岐阜県の生まれで、長良川で育った。長良川も非常にきれいな川で、広い河原が広がって周りに高い山がある感じが仁淀川に非常によく似ている。

高知で家を建てる時に、故郷の川を思い出し、「ここだ」と思って仁淀川の側に住むことにした。

子供の時に見た川と体験した川は、絶対忘れないもの。

川にどっぷり浸かって遊んだ人間は、忘れられない。そこへ帰りたくなる。

普段は子供達を仁淀川に連れていったり、生態系の話、生き物の話をしている。

以前から感じることは、四万十川や仁淀川の上流に行っても、子供があんまり遊んでいない。「こんなええ川があつたら、朝から晩まで遊んでいるはずなのに」と思うが。

梅原さんの話で、本当に映像が頭に浮かんで見えた。そういう原体験を持っていると、大人になっても気持ちが川に向く。

「仁淀川清流保全推進協議会」と言ったら、私ももっといい名前がないかなと思うが、その会長を引き受けたのは、自分達だけが仁淀川の恩恵を受けるのではなく、次の世代、その次の世代まで、仁淀川の素晴らしさ、豊かさを伝えていきたい。

仁淀川の清流保全や川と人とのつながりなど、困っていることはないでしょうか。

(井上)

越知町の黒瀬キャンプ場で子供らを対象としたイベントに、親子の参加者が非常に少なく、2組か3組位しかこなかった。

イベントを企画しても、来てほしい小学校5、6年や中学生はクラブで来ない。PTAでビラを配っても反応が無い、どうしたらいいのか、どうやったら伝わるのかが、1番の悩みです。

(梅原)

一番お金のかからない表現の方法が、ものの言い方をどうするのかということ。

「実は茶どころ しまんと緑茶」と書いているが、「実は茶どころ」が、人を惹き付ける要因になっている。しまんと緑茶とか言っても伝わらない。「実は茶どころ しまんと緑茶」で、1つのフレーズとして伝えていく。

例えば「タタキ 買ってよ」は小さなメッセージ。それを「漁師が釣って 漁師が焼いた」ということによって、「漁師が釣って」と「漁師が焼いた」の間の行間を、み

んなが想像する。

「漁師が釣ったんやろ、焼いたんやろ」、釣ってから焼くまでの間に、絶対そいつがさばいちゅうとか。さばいている間に「こらいかん、こら脂がのっちゃあせん。こんないかんぜよ」とか。勝手に想像しません？

「漁師が釣って 漁師が焼いた」の行間が、メッセージです。

下手ですよ、清流保全なんかは、「はいはい」と思うじゃない。仁淀川清流保全なんか協議会よりも、その上の言葉が大事。

高知県でいえば、「産業振興計画」、これは何のメッセージも発してない。その上に夢がある言葉があつてこそ、その事業・政策にみんなが心を寄せていく。

そこに潤滑油としての言葉をセットしていないものは、空しいものが残るし、心はがさがさする。

仁淀川にはその言葉がないかもしれない。「仁淀ブルー」というのが、やや本質を表す小さな身近な言葉に集約されているかもしれない。

「森林 森林 言っても面白くない、84（はちよん）って言わんかよ」。僕は楽しくしようよと、だから84政策課と言えよ。

言い過ぎかもしれませんが、僕の家近くに土佐山田森林センターがありますが、「84（はちよん）センター」にしようよ、朝の挨拶は「84（はちよん）」にしようよと。

岐阜県も森林と言ってるんですよ、県産材と言ってるんですよ。茨城県も県産材フェア、高知県も県産材フェア、みんな一緒。

だったらイチ抜けて、どうせべったですから高知県は、何でも出来る。

84材を使った84ハウスって言えば、一発で高知県の木のことだと分かる、なのに高知県産材を使った高知県なんか住宅、全部変えたら茨城県だつて、岐阜県だつて一緒です。

これを置き換えると、「タタキ買ってよ」は「県産材住宅」です。

そこを「漁師が釣って 漁師が焼いた」というメッセージに変えることによって、スイッチがガツンと入った状況を創り上げた。

例えば、しまんと地栗もそうです。「栗が売れん」とずっと言うのか。「中国産に押しなされ栗が200円になってしもうた」って延々と言うのか。

逆スイッチを入れなさい、しまんと地栗です、スタジオジブリです。

そういう意味で仁淀川流域は、やや表現力に欠けるなと思う。

自分達の事を高知流のユーモアを持って、どう表現するかというのが、一番お金が足りない状況でものをメッセージできる、ここが一番大事なところ。

漫画家の村岡マサヒロのマンガを見ると、とんでもないユーモアというか、この微妙なセンスは、かなわないじゃないですか。

本質的にああいうもののDNAを高知の人は持っていて、マンガ家が多いのは、そ

ういう理由。

切り返えしていくしたたかさみたいなのがあって、それにユーモアがあればさらにいい。

仁淀川の会を作るにしても、県の政策にしても、名前をちゃんと楽しく考えませんか、というのがメッセージの一番の源。しっかりと考えて下さい、という感じです。

(井上)

梅原さんに頼めば、すぐ簡単にそれが出るのかもしれないが、逆に面白くない、悩んで、もがき苦しんで這い上がっていくことも必要。

吉本哲郎さんという水俣を再生した地元学の方からも、地域の方言でも何でもいいから、地域の言葉で地域を一発で表す言葉を考えなさい、その旗のもとにみんなで集まりなさい、と言われた。

仁淀川は全国的に注目されてきています。仁淀ブルーという言葉も、候補になると思うが、もっと一発で腑に落ちる言葉を考える。梅原さんに頼むのではなく、みんなの中から出てくれば、一番いい。



(石川)

その通り。私もイベントの時に、もっと柔らかい良い表現はないかと言われても、頭が固くて出てこない。仁淀川流域の人って、一生懸命で真面目な方も多いが、伝え方に関しては、なかなか上手くいってない。

(西尾)

行政は、キャッチとかデザインとかは、その費用対効果は、事業効果はという話に終始しがちで、もっとも不得意の部分。

仁淀川流域6市町村で仁淀川の地域観光協議会を作って、「仁淀川がいい、みんなでいこう」と言ってPRしても、誰にも受取ってもらえない、メッセージも伝わらないと。コピーとかで表現することが重要。

どんなに良い物を持っていても、最初に知ってもらわないと、観光まで持っていくのは難しい。NHKが仁淀川を特集している、「奇跡の清流」を使って今年はキャンペーンをしていきたい。

(石川)

いかにメディアに取り上げられるか。

でも「奇跡の清流」って言ったら、「奇跡の清流」です。そこから話が深まるような仕掛けがない、何が奇跡なのかが。

(井上)

人によって「奇跡の清流」のとらえ方は、違うと思う。

「奇跡の清流」をとりあえずコンセプトの核にするなら、どういう意味があるのか。四万十ドラマで「水」という本を作って、考え方をまとめたように、「奇跡の清流」もいろんな捉え方があって、バラバラだとダメ。これだというのをまず作ることが必要。

(梅原)

同じ概念をなるべく多くの人で共有する、その部分を作っていくために「水」という本作りを始めた。その地域のアイデンティティーというのがあれば、それを一番のメッセージとする。

仁淀川流域の「ココロザシ」は一体何なのか、それをどう、みんなで共有するのかを考えると、そのアイデアは何百種類もある。

「僕はいっぱいありますよ」としか言わない。まず地域で考えてみてと言うのが、僕のスタンス。

例えば、鳥取県の境港から2時間程フェリーでかかる隠岐島の海士（あま）町という島の方で、15年程前に、「島じゃ常識 さざえカレー！」というのを作った。

その島では、カレーにさざえが常識。島の周りにさざえがいっぱいいる。高知から行くと、豊かだと思う。でも向こうの人は「誰にも言わんとってください、本当は牛肉入れたいんです」、この文化の違い、豊かさの尺度の違いがものすごくある。

「島じゃ常識 さざえカレー！」のデザインは、みんなに嫌がられたが、バカ売れして、今でも売れている。

その後、島のアイデンティティーが分からなくなったから、15年目に呼ばれた。

この島のアイデンティティーはあなた達が考えることで、なんで僕が考えないかんのかと言って、1年間放つといた。そしたら、色んな物を持って来るが、やっぱりあかん。自分達で中から考えて、湧き出る方がいいけれど、あんまり中におりすぎて分からない。遠くから見て「こうやんか」と言った方が、よく分かる。

向こうの案と、僕の案を見比べて、彼等に渡した。すると僕の案になった。

どんな案かというのと、その島のアイデンティティーのコピー1行です。

「ないものはない 海士町」なんです。

どういうことかと言うと、ポジティブシンキングの人とネガティブシンキングの人



と、2つにわかれるんです。

「ないものはない。どんな世界もある、ゲームセンターがないってそういう問題じゃないだろう、全てはこの島にあるんだ。」というポジティブな人と、「コンビニない、信号ない、宿泊施設ない、あかんわ」という二通りがある。

どっちでもいいから「ないものはない」を見てどう思うだろうと、「ないものはない」というフレーズを、観光ポスターにし、霞ヶ関に送る封筒に、名刺に「ないものはない」とつけた。

そうすると必ず言われる、「これは何ですか。ないものはないって。」

「いや、うちの島には、何でもあるんです。ないものはないんです。」そこから会話が始まるようにセットした。

(石川)

清流仁淀川を守って伝えていきたいというのがテーマ、「清流仁淀川」という言葉を何回連呼したか。ただ、それがどうしたみたいな、「清流仁淀川」って、そのまんま。

仁淀川流域の人が思う仁淀川のものさしというか、清流という言葉を使わずに清流を表すいい言葉がない。

(西尾)

仁淀川でも観光用ラフティングをやることになり、越知町といの町にラフティングボートが入った。去年の10月にラフティングを行って、川の中に落ちて足先まで全部見える。昔、遊んだ川のように、水が澄んでいるのがすごい。

(井上)

安居溪谷や中津溪谷とか、そこの滝が冬になると凍る。凍った滝が溶け出して、それがまた凍ると、下から盛り上がってくる氷になり、それはものすごく透明で、氷の向こうにある苔とか葉っぱが透かして見えて、「これを見せたい。これが、仁淀川の美しさなのか」と思った。

(梅原)

国道32号線で高知から松山へ行く道は、風景が本当に豊かだなと思っていた、20歳から30歳くらいまでの間。高速が出来て通らなくなったけど、楽しみなルートでした。国道33号線のほうは、運転がしにくく、景色もなかなか楽しめない。

松山行きのルートは、仁淀川も見ながら植林じゃない雑木、色んな木の間を抜けていく、ずっと上がっていくとダムがあり、その下流に流れていく水も目の中に入ってくる、まさに仁淀ブルー。

高橋宣之が仁淀の海の波をずっと撮っていた。海からずっと上流の源流点の1滴の

水滴にいたるまでを撮影していく、その様子を写真で見せてもらったし、ずっと仁淀川が自分の頭の中にあった。

四万十川には光が当たっていると思うけれども、光が当たっていないところの価値を担保する、そういうことに新しい価値があるのではないのか。

ただ、光が当たればいいのではないと、仁淀川には光が当たらないほうがいいのではないか、クローズされた清流があることが、持続する価値ではないのかと思いつつながら、長い間、仁淀川を見ていました。

高橋宣之とは相当古い付き合い。彼に色々オファーがありますが、ドキュメンタリーで、2時間のネイチャー番組なんかでも断ったのを見て。「テレビが、嫌ながよ」と言って、クローズされていた彼だけの世界を、僕や一部の人が見ていた。

今回、NHKのハイビジョン機材を利用しながら、また新たなものを作っている。

仁淀川に光が当たるのは、今後長期的なものが想定されますが、スポットを当てずに、宝石のように置いときたい存在がありました。

僕はスポットの当たってしまった日本最後の清流という、形容詞がだいぶ大きくつき過ぎたところで住み、また四万十ドラマという、いわゆる生き方を含めての仕事をしていました。仁淀川には上手にスポットが当たって欲しいなと思う。

(石川)

仁淀川が有名になり、産業振興を進めることも1つの意見ではあるが、何もなくても、なんとか暮らしていき、仁淀川の流域に住んでいる人が、幸せだなんて実感できることが理想。世の中の価値観が変わって、原点に戻ることは難しいが、きれいな仁淀川があり続けることが、人と川がつながって、地に足をつけて暮らしていくうえでの原点。

地元から気持ちが離れても、また仁淀川に帰ってきたい、そんな川であって欲しい。「すごい仁淀川がここにある。私達はその仁淀川を伝え、守る」ために、色々やっていると、いうことをうまく表現したい。

(会場の意見)

人を惹き付けるような川になること。他の県の汚い川も、仁淀川のように澄んだらいい、そのような清流にする取組をやれば、1番壮大で面白い。なんぼ売れたは、あまり面白くない。「おお、そうか。高知の川が、こうなるやったら俺んくの川もなるぞ」という、意気込みを持つことが、壮大な試みだと思う。

(会場の意見)

家業は林業で近隣の雑木を切って、パルプ会社にチップを出し、拡大造林もしてきた。

今も山の手入れを続けているが、間伐された木の根を見ると浅いので、水土保持林にはほど遠い。未来にもっと美しい川、水量のある仁淀川であってほしいし、潜在能力もあると思う。清流というだけであれば、過疎高齢化で人がいなくなるので、放置していたらきれいな川になると思う。

(梅原)

日本の人口が2050年までに1億人をゆうに切る。それから考えてもそうでしょう。

高橋宣之はずっと森に入ってる、延々と300日以上森の中にいる。そういう人の目線から見る森林行政とか、あるいは混合林とか原生林とか、あるいは植林の部分はどうか。

彼は行政に向かって言わないけど、彼の話ピンポイントで聞くと「そうやね」という事がいっぱいある。

面白いのは、行政が彼の森の話聞いて、なんらか政策に活かしていくような事になれば、そのことはすごく素晴らしいことではないか。

本当に森に入ってる高橋宣之の目線で、森のことを考えて、県の政策に活かして欲しいと感じた。

(石川)

高橋さんに来ていただいて、行政と話が出来たらいいなと思います。

最後に、感想なり、今後の決意表明なりをお願いします。

(西尾)

この地域にとって仁淀川と、山や森が持っている意味は、非常に大きいことが分かった。

総合的に見てもこの地域はすごくいい、川がきれいに保全されている、新しい取組も実施されているような先進的な地域になると、その結果、交流人口が増えて、観光事業をやることも有効的になる。

環境を大事に守っていく中で、色々な取組が実施され、それが産業につながっていく、それが四万十川のブランドの意味だと思うので、仁淀川も出来るだけそういう方向に進化していくことを行政も考えていきたい。

(井上)

流域で計画を立てるために、良いヒントをもらったと思う。

梅原さんに相談に行った時に、「住民の方がどんなことをしたいのか、どんな仁淀川になりたいのかというのを、私に伝えてくれたら、それなりの言葉はすぐ出る」と言われた。

どんな仁淀川になりたいか、将来ここにどんな人に住んでもらいたいとか、どんな

住み方をしたいとか、どんな仕事をしたいとかいうのを、早急に仁淀川流域でまとめて、相談に行ければと思う。

(梅原)

絶対価値から言えば、日本の中で、仁淀川という絶対価値はすごい。

この地形全域を、源流まで想像するに、すごい財産がある。

それが、3月の末、NHKスペシャルで放送され、みんながその映像を見て、気付くと思う。とんでもない絶対価値があることが明らかになった時期を迎えました。

メッセージというのは不思議なもので、「自然を守りましょう」と言うと、普通の言葉です。

しかし、これを「自然はゆっくり汚しましょう」。川に変えると、「清流はゆっくり汚しましょう」となる。

「自然をゆっくり汚しましょう」あるいは「清流はゆっくり汚しましょう」と言うと、真実味がグッと増してくる。

みんな簡単に守ろうと言ってるが、1個も守ってない。生きている限りは、何か汚している。その方が真実に近い。

「清流はゆっくり汚しましょう」、この強烈な皮肉と本質。

どんなにやっても汚れていく、だったら先に汚しましょう、ゆっくり、いかに微妙に汚していくことをメッセージとする方が、もっと深い本質を語っているのではないか。俺は仁淀川にあげようと思ったけど、自分で考えると言うんで、四万十川で使うことにします。

(石川)

最後に大きなヒントをいただいて、「これはしめた」と思ったんですが、四万十川に行ってしまうと残念。

流域の人が思いを一つにして、仁淀川というものの将来あるべき姿というものを描いていけるような、そういうシンポジウムになったらいいなと思います。今日はみなさん、ありがとうございました。



